協働体としての主体――寄生から共生へ

先日の研究会で、私の村田先生のご質問の趣旨が我ながら判然とせず、いかにも言葉足らずだったように思います。あの後いろいろ考え、私が言わんとしたこと、現状の経営学への疑問をまとめると以下のようになります。

２０世紀が企業と組織の時代であったとして、それが２１世紀の現在、全くの機能不全に陥っているのが事実とすれば、新しい経営のイメージを創出するには、そもそも企業と組織の本質を捉え直し、自己批判して、解体しつつ再構築せねばならない。

２０世紀型企業＆組織を自動的に延長する、いわばモデル・チェンジするのでは全く不十分で、これを解体せねばならないと私は思う。それには葛藤と軋轢が避けられない。これをどう乗り超えるか。軟着陸があり得るのか。

２０世紀を企業が席巻したのは事実として、それにより失われたものが多々あるように思われます。それは端的に言って「公共」の理念です。企業の利潤や利益に乗らないものが犠牲にされてきた。

２０世紀は戦争の世紀であり、熱い戦争が終わった後も、冷たい戦争が続き、冷戦体制が終わると今度は経済戦争の時代と相成った。戦争モデルの経済と企業により今なお世界は蹂躙されている。

２１世紀に入り、ネットの飛躍的な発達とともに、組織によらず巨大な利益を得る個人が現われてきた。とはいえ、かれが持続的な収益構造を維持せんとすれば、自ずと組織に拠らざるを得ないでしょう。そのとき組織体の構造は変革され、脱構築される他ない。これまでの企業論理には還元されない、新しい組織体が構想されねばならず、それには見失われた公共の倫理を取り戻す必要があるでしょう。

一方では国家の持つ力が再評価されねばならず、他方では国家権力の統制を受けない民間のNPOや、ボランティア活動が世界規模で組織化されねばならない。そんな動きはすでに至るところで始まっている。

問題なのは、かつての企業イメージが亡霊のように私たちの社会に取り憑き、新しい社会組織体を構想し、構築するのを阻んでいることです。経営学がたんに社会の現実を後追いするのではなく、新しい組織体のイメージを自ら社会に提起するには、上記の古色蒼然とした企業イメージを批判し、打破する必要があるでしょう。それには刷新されつつある社会と世界の相貌をリアルに捉える必要がある。ひいては自ら新しいヴィジョンを構想し、構築する必要があるのです。

主体が一枚岩ではないように、組織も一枚岩ではない。まして国家はそうではない。企業体を一枚岩の組織と見なすようでは、現代企業の本質について何を理解したことにもなりません。

今なお企業組織や国家は旧態依然たる主体概念をモデルにしているようだ。私たちが目指すべき脱主体とは反―主体でも、無―主体でもありません。主体を変容させつつ、いくつかの主体性に開くことです。それを複数の主体と言ってもいいでしょうが、複数であることは無数であることとは違う。そこには共に受け入れ、制御すべき限界がある。

複数の主体が共に牽制し、統制し合いながら共生し、共進化を遂げること。それにより各自がそれぞれのやり方で脱主体を完遂すること。そこには自らを解体しつつ再結合し、再統合する不断の過程がある。「脱構築」という言葉を用いてもいいでしょうが、新たに構築されるものは、以前と似ても似つかぬものになるでしょう。それは単なる旧来の延長ではあり得ず、まったく新しいもの、未知なるものへの生成を呼び招くことでしょう。